

YOKOHAMA EYE'S 2022

ヨコハマアイズ 2022

特集 「ヤングケアラー」を考える

講演録

2022年度 子ども・若者エンパワメントセミナー
ヤングケアラー ～気づき、つなげる～
濱島 淑恵 (大阪歯科大学教授)

特別寄稿

ヤングケアラー ～横浜での支援を考える～
木下 こゆる (横浜ヤングケアラーヘルプネット共同代表)

特別寄稿

神戸市における子ども・若者ケアラー交流と
情報交換の場「ふうのひろば」について
辻 幸志 (特定非営利活動法人こうべユースネット理事長)

インタビュー

元ヤングケアラーの声

データで見る
青少年

青少年の「成人」意識と
成年年齢引き下げに関する
調査報告



はじめに

「YOKOHAMA EYE'S 2022」をお届けいたします。

長引くコロナ禍もようやく収束の兆しが見え、社会・経済活動が活発になってきました。それに伴い青少年の活動・交流の場や機会も徐々に再開してきています。

しかし、長引くコロナ禍の様々な制約と社会変化により、急速に進行した地域社会における関係性の希薄化は、子ども・青少年をはじめ子育て世代の保護者にも社会的孤立など様々な問題をもたらしています。

近年その表れとして、顕在化する子ども・青少年の貧困問題のひとつである、「ヤングケアラー」の問題が様々な分野で取り上げられるようになってきました。

横浜市でも、2022年に市内の公立学校に通う小学5年生、中学2年生、高校2年生、約7万5千人を対象にヤングケアラーに関する実態把握調査を実施し、その結果を公表しました。今回本号では、この調査結果を一部抜粋して掲載するとともに、様々な視点から「ヤングケアラー」を取り上げております。

講演録としては、2016年に高校生を対象としたヤングケアラーに関する調査を日本で初めて行い、2020年に厚生労働省が実施したヤングケアラーに関する全国調査に研究メンバーとして携わられた、濱島淑恵教授にご講演いただいた「子ども・若者エンパワメントセミナー」を掲載しました。

特別寄稿①には、横浜市内で先駆的にヤングケアラー支援に取り組まれている「横浜ヤングケアラーヘルプネット」共同代表の木下こゆるさんにご寄稿いただきました。

併せて、元ヤングケアラーの声として、二件のインタビュー記事を掲載しました。

特別寄稿②には、こども・若者ケアラーの相談・支援窓口を全国に先駆けて開設された「特定非営利活動法人こうべユースネット」理事長の辻幸志さんにご寄稿いただいております。

最後のまとめのページにも記載させていただきましたが、私たちよこはまユースでは人々のつながりを大切に課題に取り組み、横浜市の青少年育成・支援の施策を推進してまいります。皆様におかれましても、引き続きご理解とご協力をお願い申し上げます。

最後に、2022年4月に民法の一部を改正する法律が施行され、成年年齢が20歳から18歳に引き下げられました。よこはまユースでは、その対応の一環として、2021年度に市内在住・在学・在勤の17歳から25歳までの900人を対象に「成人」意識と成年年齢引き下げに関する調査を実施しております。今回のテーマとは別になりますが、その調査結果を掲載しました。青少年理解、また皆様の活動のご参考にいただければ幸いです。

2023年3月末日
公益財団法人よこはまユース
代表理事 大向 哲夫

特集「ヤングケアラー」を考える

概要

ヤングケアラーとは？ ヤングケアラーを取り巻く環境 04

講演録

2022年度 子ども・若者エンパワメントセミナー
「ヤングケアラー ～気づき、つなげる～」講演録（要旨） 06

特別寄稿①

ヤングケアラー ～横浜での支援を考える～
木下 こゆる（横浜ヤングケアラーヘルプネット共同代表） 10

インタビュー

元ヤングケアラーの声 13

特別寄稿②

神戸市における子ども・若者ケアラー交流と情報交換の場「ふうのひろば」について
辻 幸志（特定非営利活動法人こうべユースネット理事長） 16

まとめ

特集のテーマについて 18

データで見る青少年

青少年の「成人」意識と成年年齢引き下げに関する調査報告 19

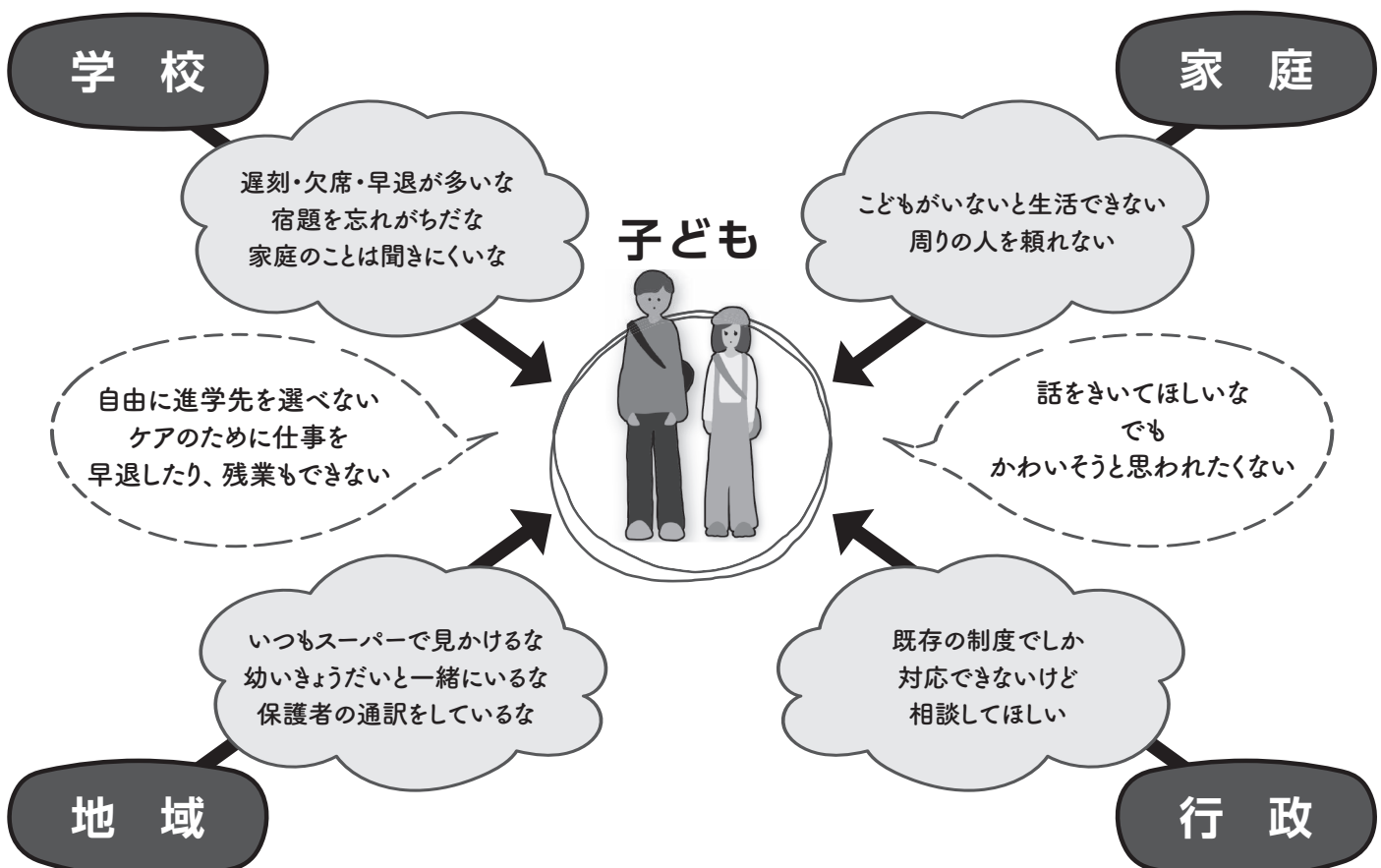
▶ ヤングケアラーとは？

「ヤングケアラー」とは、大人が担うようなケア責任を引き受け、家事や家族の世話、介護、感情面のサポートなどを行っている18歳未満の子どもをいいます。

■ 障がいや病気のある家族に代わり、買い物・料理・掃除・洗濯などの家事をしている
■ 日本語が第一言語でない家族や障がいのある家族のために通訳をしている
■ 家族に代わり、幼いきょうだいの世話をしている
■ アルコール・薬物・ギャンブルなどの問題のある家族に対応している
■ 障がいや病気のあるきょうだいの世話や見守りをしている
■ がん・難病・精神疾患など慢性的な病気の家族の看病をしている
■ 目を離せない家族の見守りや声かけなどの気づかいをしている
■ 障がいや病気のある家族の身の回りの世話をしている
■ 家計を支えるために労働をして、障がいや病気のある家族を助けている
■ 障がいや病気のある家族の入浴やトイレの介助をしている



▶ ヤングケアラーを取り巻く環境

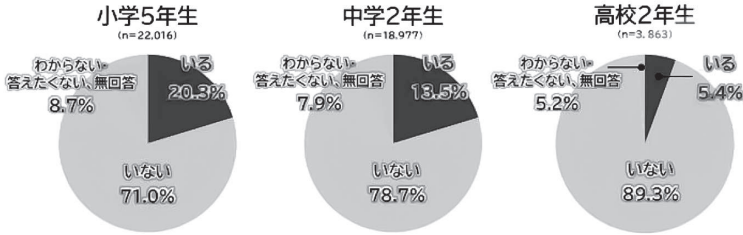


▶ 横浜市の調査（参考）

世話をしている家族の有無

小学5年生の20.3%（5人に1人）、中学2年生の13.5%（7人に1人）、高校2年生の5.4%（19人に1人）が家族の中に世話をしている人が「いる」と回答している。

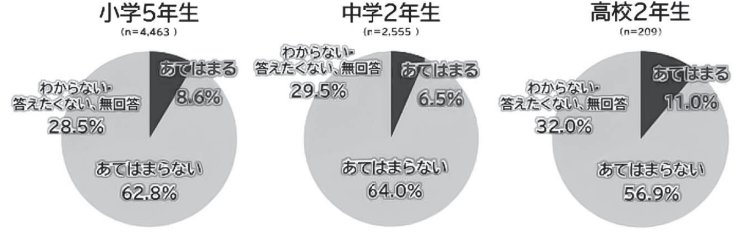
家族の中にあなたがお世話をしている人はいますか



自分がヤングケアラーであると思うか （対象：家族の世話をしている子ども）

自分がヤングケアラーだと思う子どもの割合は、小学5年生で8.6%（全体の約1.7%）、中学2年生の6.5%（全体の約0.9%）、高校2年生の11.0%（全体の約0.6%）となっている。

あなたは自分が「ヤングケアラー」にあてはまると感じますか



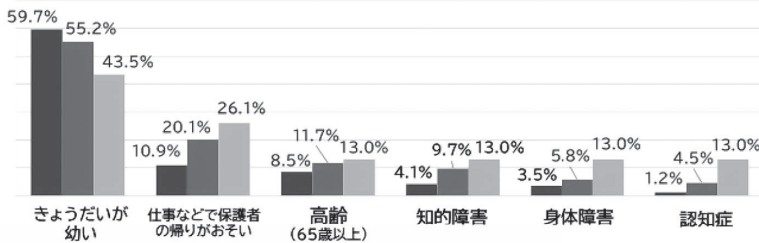
世話をしている理由

（対象：家族の世話をしており、自分をヤングケアラーだと思う子ども）

いずれの学年も「きょうだいが幼い」が最も多く、次いで「仕事などで保護者の帰りが遅い」となっている。高校生は他の学年と比較し、家族の障害や病気などの理由が多くなっている。

あなたがお世話をしている理由を教えてください（複数回答）

■小学5年生(n=340) ■中学2年生(n=154) ■高校2年生(n=23)



世話の頻度

（対象：家族の世話をしており、自分をヤングケアラーだと思う子ども）

いずれの学年も「ほぼ毎日」が最も多く、高校生は約95%が週に3日以上世話をしている。

■ほぼ毎日
■週に1日～2日
■週に3日～5日
■1か月に数日・その他
■わからない・答えたくない・無回答



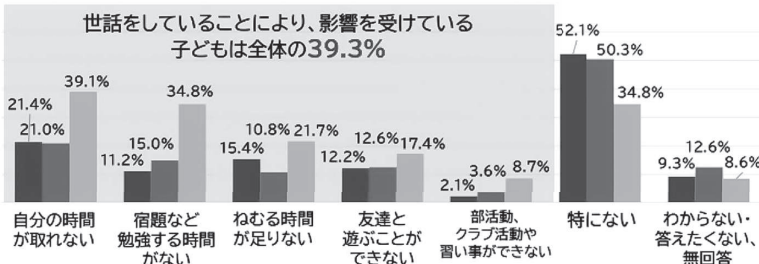
世話をしていることによる影響

（対象：家族の世話をしており、自分をヤングケアラーだと思う子ども）

子どもの約4割が、「自分の時間が取れない」「宿題など勉強する時間がない」などの世話による影響を受けている。

世話をしているために、やりたいけれどできていないこと（複数回答）

■小学5年生(n=384) ■中学2年生(n=167) ■高校2年生(n=23)



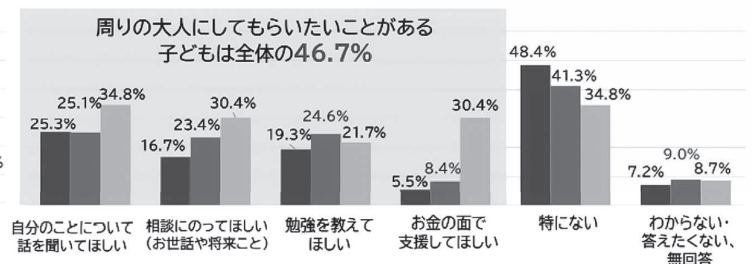
周りの大人にしてもらいたいこと

（対象：家族の世話をしており、自分をヤングケアラーだと思う子ども）

子どもの約半数が、周囲の大人に対し、「自分のことについて話をきいてほしい」「勉強を教えてほしい」など、してもらいたいことが「ある」と回答している。

あなたは周りの大人にしてもらいたいことはありますか（複数回答）

■小学5年生(n=384) ■中学2年生(n=167) ■高校2年生(n=23)



2022年度 子ども・若者エンパワメントセミナー

「ヤングケアラー ～気づき、つなげる～」講演録 (要旨)

大阪歯科大学教授

濱島 淑恵

■ ヤングケアラーとは

ヤングケアラーとは「家族にケアを要する人がいる場合に大人が担うようなケア責任を引き受け、家事や家族の世話、介護、感情面のサポートなどを行っている18歳未満の子ども」（日本ケアラー連盟）を言います。「ケア」とは例えば介護が必要な祖父母の見守りや年下の兄弟の世話をしたり、精神的に不安定な親や認知症の祖父母の感情的サポートをしたりすることです。他には外国にルーツがある子どもが親の通訳として役所や病院に付き添ったり、聴覚障がいのある家族の手話通訳をしたりして他人とのコミュニケーションを補助する場合や、アルバイトで家計を助けている場合なども含まれます。ケアというと私達は身体的な介護をイメージしますが、非常に広く“お世話全般”を指すと思ってください。

そしてポイントは「大人が担うようなケアの“責任”を引き受けている」という点です。普通のお手伝いならさばることもできますが、ケアを必要とする家族がいる状況では何が何でも自分がやらなければいけないという責任がかかってきます。また先ほどの定義には18歳未満とありますが、ケアの影響は大人になってから出ることもあるので、今日はあまり年齢にこだわり過ぎず、ケアを担う子ども若者達というイメージで話を聞いていただければと思います。

ところで、家族が家族のケアをすること自体は決して悪いことではありません。ケアをする中で家族との絆が強まったり、自分が役に立っているという誇りを持てたりします。家事や育児などの生活能力も向上しますし、思いやりの心も育ちます。一方で過度なケアによって様々な困難が生じることもあります。

■ 日本におけるヤングケアラーの現状

私と関西学院大学の宮川は2016年に大阪府で、その2年後には埼玉県で調査を行いました。どちらも高校生の5%が家族のケアをしているという結果でした。また国が定時制と通信制の高校で行った調査ではもっと割合が高く、通信制で11%、定時制では8.5%がケアをしていました。実際に私が出会ったケアラーでは、ケアと両立できずに全日制を退学して通信制に変わったり、小さい頃からずっとケアをしていて途中で勉強についていけなくなったため初めから定時制に行ったりしたケースがありました。さらに国は昨年度小学6年生と大学3年生を調査して両方とも約6%がケアを担っているという結果が出ています。

ヤングケアラーがケアをしている相手のうち、祖父母は要介護状態、父母は病気や障がいがあるケースが多いです。兄弟は幼い兄弟の他、障がいがあるケースも見られます。また外国にルーツのあるヤングケアラーもいます。

ケアの内容は私が行った調査では第一位が「家事」で、これは他の複数の調査でも上位に入ります。他には力仕事や外出・通院時の付き添い、感情面のサポート、病院や施設へのお見舞い、兄弟の世話、見守りなども上位に入ります。また、身体介助や医療的ケアなどいわゆる介護をしているケースもあります。

このようなケアの特徴がヤングケアラーの見えにくさにも繋がっています。例えば介護が必要なお年寄りがいるお宅を訪問している時に孫が買い物から帰ってきて、それがケアだとはなかなか思わないでしょう。感情面のサポートも周囲からはただ話し相手をしているように見えます。

ここで事例をご紹介します。1例目は兄妹と父、祖母の家族です。障がいのある父親は長時間労働で非常に忙しく、家事は祖母がしていましたが、祖母が高齢になり足腰が弱くなってくると今度は子ども達が家事や祖母の介助をするようになりました。そのためこれは「ヤングケアラーあるある」ですが、妹はあまり厳しくない文科系の部活をあえて選び、部活が終わるとケアのため一目散に家に帰っていました。非常に印象的だったのが「家で勉強するっていう意味が分からない」という彼女の言葉です。先生は家で勉強しなさいと言うけれど、自分の生活のどこにそんな時間があるのか、なぜ皆が家で勉強できるのか不思議で仕方なかったそうです。それでも頑張り屋の彼女は必ず学校には行っていました。すぐに気絶するように寝てしまったそうなので、慢性的に疲労が溜まっていたのだと思います。

2例目は母子家庭で、私が話を聞いた女性は小学生の頃から家事や年下の兄弟の世話をしていましたが、母親が精神疾患になったため母親の感情的サポートも加わります。やがて彼女だけでは家が回らなくなったので祖母が同居してくれるようになりましたが、彼女の負担は軽くなりませんでした。今度は祖母のストレスがたまり、祖母の感情的サポートが加わったからです。そのような生活では家で勉強できないので宿題は全部休み時間に済ませていましたが、それだけでは勉強時間が足りず成績はいつも悪かったそうです。こんなに真面目に休み時間にまで勉強しているのになぜ成績が悪いのか、先生は不思議に思っていたに違いありません。

それでも何とか高校に進学した頃、母親の病状がかなり回復し彼女はホッとしたのですが、その途端に今度は彼女が謎の体調不良になります。通信制高校に転校し大学まで進学しましたが、その後も不調は続き結局退学を余儀なくされました。私が彼女に出会ったのはその頃でした

が、彼女は何度も言うていました、私本当に勉強したかったんですと。

家事は毎日のことなので子どもは時間も体力も奪われますし、感情的サポートは言葉や話題を選びながら相手をするので非常に緊張感を伴い心身が疲労します。こうしたケアによって自分の生活や心身の健康に負荷がかかっていることに本人達は気づいていません。

他にも学校や役所へ提出する書類を親の代わりに書いたり、自分が家族の中のキーパーソンと見なされて病院や福祉からあてにされたりするのが辛かったという話も聞きました。また、ケアによって家族関係がぐちゃぐちゃしてしまった時に、子どもが家族の調整役にならなければいけないこともあります。

調査によると、ケアの頻度はほぼ毎日というケースが半数程度、1日のケア時間は1時間未満や2時間未満といった短時間のケースが3～4割くらいでした。一方で長時間ケアを担っているケースも一定数おり、私が大阪で行った調査では学校がある日に4時間以上ケアを担っていると回答したのは14%、8時間以上は5%でした。

ただ現在は負荷が大きくなくても今後悪化する可能性もあります。本当に辛くなってからではSOSを出す余力もないですし、そこからいきなり知らない大人に家の事を話せる訳もありません。ですから普段から他愛のない話ができる関係性を作っておいて、必要なタイミングで支援できるようにしておくことが重要です。

■ヤングケアラーが抱える問題・困りごと

ヤングケアラーは家でやるが多過ぎて学校の宿題ができなかったり、遅刻や欠席をしたり、授業中に疲れて寝てしまうこともあります。そんな時は先生もいきなり怒る訳ではなく当然理由を聞きますが、子どもは自分の状況をうまく説明できないことがあります。例えばある中学生は

先生から遅刻の理由を聞かれて寝坊したと答え、いい加減な奴だと思われてしまいました。でも実際は精神疾患のある母親が家でずっと泣いていたので、夜中過ぎまで付き添っていて寝られなかったのだという状況をうまく言語化できなかったのです。

友人関係でも流行りの話題にはついていけず、家族のことは空気が重くなってしまうので誰にも話せません。部活でも遅刻や欠席をするのでサボっていると思われたり、付き合いが悪いと言われて友人関係がギクシャクして、軽いいじめに発展したという話も聞きます。

そうした孤立状態にあると、自分自身も情緒不安定になったり慢性的疲労状態になったりします。ただ本人はケアをしている自覚やケアの負担が不調と関係していることに気づきにくいので、それだけ周りが気づくことが重要になります。また自分のキャパを超えて頑張り続けた結果、ケアが終わった途端に今度は自分の心身に不調をきたしているわゆる介護ロスになることもあります。そして今は現役のヤングケアラーへの支援が中心になっていますが、ケアが終わった元ヤングケアラーにも、勉強の遅れや健康を取り戻して新しく人間関係を構築してもらうために様々な支援が必要です。

他にも子どもが病気の親をケアしている場合は親が子どもを頼るようになって親子関係が逆転したり、祖父母や兄弟のケアを親と一緒にしている場合は親が同僚のようになつたりすることがあります。子どもが子どもらしくいられず、子どもにとって親の存在が欠如してしまうこともあります。また、とにかく辛かったのは誰にも話せず分かって貰えないことだったという話もよく聞きます。家族をケアすることは決して悪いことではありませんが、子どもに様々な困難や負の影響が生じ、時には子どもの人権に関わる場合もあるのです。

■ヤングケアラーのために地域ができること

今ヤングケアラーはすごくしんどい可哀そうな子だという理解が余りにも強いですが、彼らは可哀そうな子と言われるのは一番心外だと思います。もし言えるとすれば非常によく頑張っている子だと思います。

ですからまず皆さんにはヤングケアラーを「正しく知る、理解する」ということを広めていただきたいです。そして可哀そうな子という一方的な見方ではなく、彼らの「価値」と「大変さ」の両面を理解してください。彼らは、自分は同年代の若者と同じ様な経験をしていないから価値がないと言いますが決してそうではなく、ケア経験から様々なことを学んでいます。またヤングケアラーの話をする親は一体何をしているのかと批判されることがありますが、親御さん自身も孤立して辛い思いをしていることが多いので、親子両方への支援が必要です。

次に「ヤングケアラーという視点を持ち、気づく」ことです。例えば近所にちょっと気になる子がいたら、もしかしてヤングケアラーかと思ってみてください。そこで家での様子などを聞いてみると、お手伝いが多いとか、障がいのある家族がいるという状況が見えてくることがあります。その時大切なのは、そんなこともしているのか、それは大変でしょうなどといきなり言わずにただ話を聞くことです。そして何か支障が出ていないか確認したくなったら「ヤングケアラーあるある」を聞いてみてください。例えば夜眠れているか、家で勉強する時間があるかなど、ヤングケアラーに起こりがちなことを具体的に聞いてあげると彼らは答えやすいと思います。ただ、「程よい距離感」も大切です。あるヤングケアラーは、近所のおばちゃん会う度におはようとか、何かあったら言ってねと必ず声を掛けてくれたそうです。自分がそのおばちゃんに相談したことはなかったし、自分の家の問題を解決してくれたこともなかったけれど、何かあったらこの人に言えばいいと思っただけ

で安心したと言っていました。

そして必要に応じて医療や福祉に繋ぐことも大切です。先ほどの最初の事例は、祖母が日中一人きりにされてネグレクト状態であると認定され、家族と引き離されました。彼女は何とか祖母のためになりたかったのに、非常に深い傷が残りました。その後彼女は福祉系の大学に進学し、介護保険の存在を知って驚いたそうです。子どもや父親だけではそういう情報を入手することはできず、知っていたらもっと違ったのにと言っていました。とは言え地域の方が突然地域包括支援センターに電話するのは難しいと思うので、まずは自治体のヤングケアラー相談窓口などに繋ぐのがいいと思います。また長時間のアルバイトで家計を支えているケアラーも多いので、経済的な支援も非常に有効です。経済的な負担がなくなるだけで自分のことを考える余裕ができることもあります。

ヤングケアラーの支援は子どもが対象だと思われがちですが、まずは大人への支援が必要です。子どもの背景にいる、困難を抱えてケアを必要としている大人が適切に支援されていれば、子どもが自分も何かやらなければとは思いません。それでも家庭環境の改善は簡単ではないので、そういう意味で子どもへの支援も必要です。

そこで私は彼らの居場所として「ふうせんの会」を作りました。すでに地域にある学習支援活動や子ども食堂に

ヤングケアラーという視点を入れるのも良いでしょう。他には、ヤングケアラーが子どもに戻れる時間を確保するためのレスパイト（小休止）サービスや、近所の大人が親の代わりに子どもを動物園に連れて行ってあげたりする「befriending」というボランティア活動も参考になると思います。

最後に、恐らく彼らが一番必要としているのは「寄り添う支援」だと思います。これは誰でもできますから、皆さんぜひ近くの頼れる大人として彼らの話を聞いてあげてください。大人の知恵で解決できることもあるので、一緒に進路を考えてあげたり、窓口につき添って書類の書き方を手伝ったりするのもいいでしょう。彼らが自分ではうまく説明できないことを代弁してあげるのも有効です。学校の担任や養護教諭が他の先生にも情報共有してくれて学校に行きやすくなった例もあります。ただ、その時ほどここまで話してよいか予め本人の意思をきちんと確認してください。ヤングケアラーは複合的な問題を抱えるケースも多いので、行政、医療、学校などが連携して支援していくことも重要です。

最後に、「助けて欲しいとは思わない。ただわかってほしかった。」という言葉をご紹介します。ヤングケアラー達の一番の思いはここです。何も自分の家庭を変えてくれとまでは思わない、ただわかってくれるだけで本当に嬉しいんだ、助かるんだということです。ぜひヤングケアラーの理解者になり、味方になることから始めていただければと思います。

濱島 淑恵氏プロフィール

大阪歯科大学教授。家族介護者が抱える生活困難と支援に関する研究に取り組み、2016年に全国初の子どもを対象としたヤングケアラーに関する質問調査を実施した。2019年に現・元ヤングケアラー達の集い「ふうせんの会」を有志と立ち上げ活動を続けている。

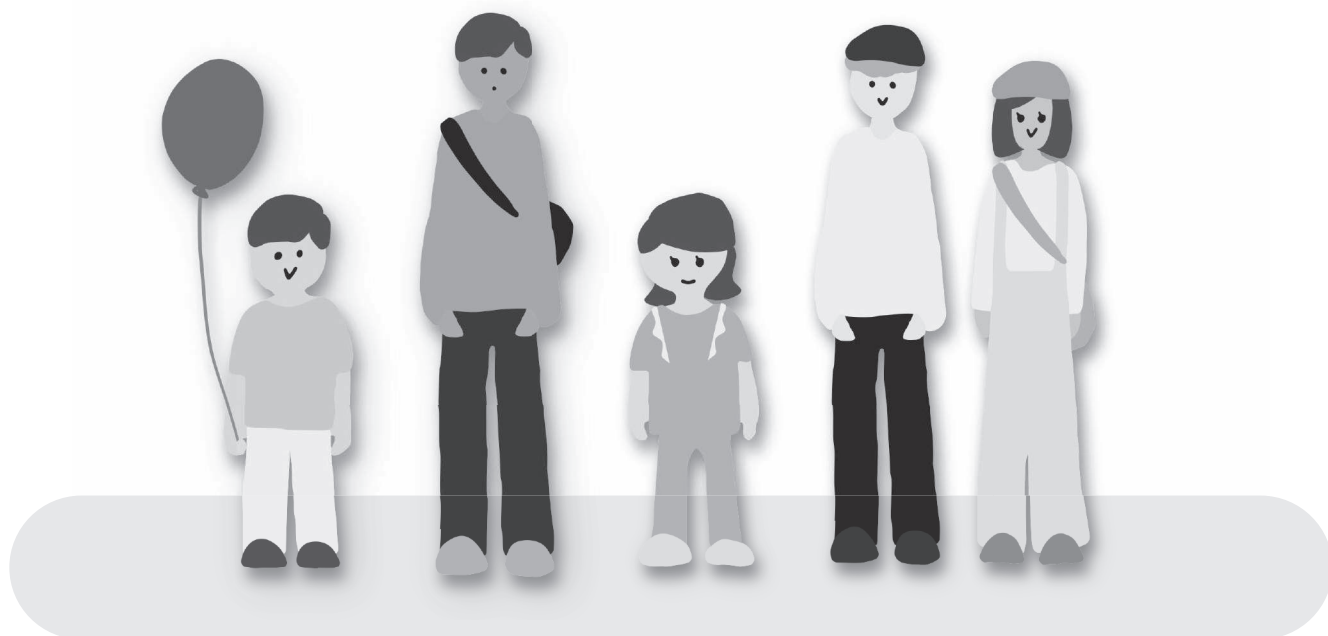
2020年度、国が実施したヤングケアラーに関する全国調査の研究班メンバー、2021年度は小学生、大学生等を対象とした全国調査の研究班委員長を務めた。現在は神戸市こども・若者ケアラー支援アドバイザー、大阪市ヤングケアラープロジェクトメンバー。

主な著書に「子ども介護者－ヤングケアラーの現実と社会の壁－」（角川新書）がある。

ヤングケアラー ～横浜での支援を考える～

横浜ヤングケアラーヘルプネット
共同代表 木下 こゆる

近年、「ヤングケアラー」という概念が少しずつ広まってきている。行政による実態調査や条例化も行われ、学校や地域でもヤングケアラーを知るための勉強会や支援体制作りが始まっている。実際にどんな支援が求められているのか、どんなことに注意したらよいかを考える際、本稿が一助になれば幸いである。



◆横浜ヤングケアラーヘルプネットの活動

まず、一例として私たち「横浜ヤングケアラーヘルプネット」の活動を紹介したい。

「ヘルプネット」は、毎月一度、横浜市内でヤングケアラーやその支援者が集まる「定例会」を開いている団体だ。2014年に発足して以降、欠かさず定例会を続けている。

定例会は毎回2時間で、参加者は10～15人ほど。特にテーマはなく、互いに近況や悩み事を話したり、全国のヤングケアラー支援の動きや報道について情報交換や感想を述べ合ったりすることが多い。毎回参加する人も、数カ月～数年ぶりに参加する人もいる。

コロナ禍以降、オンラインも併用しており、都内在住者や他県に引っ越した元参加者など、遠方からも気軽に参加してもらえるようになった。

活動の契機は、2012年、祖父母を介護する若者ケアラー2人が中区の男性介護者の会で出会ったことだ。他の参加者は60～80代の男性ばかりであり、「若い世代だけで語り合える場も必要なのでは」という思いが募り、

その男性介護者の会を運営していたケアマネジャーとともに、「横浜ヤングケアラーヘルプネット」を立ち上げることになった。

◆考えられる地域の取り組み——「ヘルプネット」の特徴から

ヤングケアラーの支援を考えると、まず考えられるのが当事者の集いの場だろう。その際、子どもが参加しやすい形にするにはいつどこで会を開けばよいか悩ましいと思う。

私たちの会の場合、発起人が20代だったことから、自分たちのような若者ケアラー（大学生や社会人）を想定して、定例会は平日の夜に設定した。そのため、「現役」ヤングケアラー（18歳以下）が参加することはほぼない。当事者の多くは、18歳以上になった「元ヤングケアラー」や、若者ケアラーだ。当事者がケアする相手は、障がいのあるきょうだい、若年認知症の親、祖父母など様々で、ケアの対象が誰でも参加できる。また、もう一人の発起人がケアマネジャーだったことから、当事者以外に、「力になりたい」「どんなことに困っているか知りたい」と思ったださる支援者や研究者も多く参加している。ケアマネジャーや看護職など介護・看護の専門職、小中高の教員や大学教授の方々だ。

当事者に区分を設けていないこと、支援側も参加できることは、「ヘルプネット」の特徴の一つだ。様々なケースの当事者が集まることで、異なる見地からの経験や気持ちに気づくことにつながるし、支援者もいることで、福祉サービスの使い方や認知症の人との接し方について専門的なアドバイスをもらったり、ヤングケアラーを支援する全国の自治体の動きを教えてもらったりすることも多い。

逆に、当事者だけ／若年認知症の親をもつ子どもだけなど同じ状況の人が集まった方が深い話ができるという考え方もあると思う。同じ横浜市内でも、休日に小学生ケアラーだけの場を設けている団体もある。年代別やケース別の集いが増えていけば、当事者が自分の気持ちに沿って場を選ぶことも可能になるだろう。

◆地域や学校でできること——参加者の声から

集いのほか、どんな支援が考えられるだろう。「ヘルプネット」でよく話題に上がるのは、介護サービスなど福祉制度について、また自分の将来についての相談先、緊急時にケアを頼める制度などだ。また、特に年少のヤングケアラーは、ケアのある生活が当たり前と思って育ち、ヤングケアラーの概念を知らない可能性がある。成人した当事者ですら、「自分が『ヤングケアラー』という名前のついた存在で、つらいと言っていいんだと知って救われた」と話す人がいることを考えると、自分で情報に接することの少ない年代にヤングケアラーの概念を広めることも、大切だと思う。

どのような支援を考える際にも、留意すべきだと感じていることがある。「当事者の気持ちを尊重すること」だ。例えば、小・中・高校時代にケアを担った当事者から、正反対の声を聞くことがある。「教師や友達に話せて楽になった」「自分のことをわかってくれる人がいて安心できた」という声と、「(教師にも友達にも全く家庭の話をしなかったので)学校にいる間は、ケアを忘れられた。変に気遣われるより『普通の子ども』でいられてよかった」という声だ。私自身は前者のタイプだったため、「知られていないことが幸せだった」という声は想定外だった。支援側は、「支援を必要としているはず」「ヤングケアラーを見つけて助けなければ」と思うからこそ支援を始め

特別寄稿①

るわけだが、本当にそれが本人の意思に沿うのか、周囲に知られることや家族と話し合うことをどう思っているか、そもそもケアを担うことをどう受け止めているか、丁寧に確認することが不可欠だ。「当事者」から「支援者」に軸足が移る中で、私自身も新たに気づかされ、大切にしなければと思う考え方だ。

ただ、もしも家庭のことを話せない原因がいじめや特別視につながるという不安なのだとしたら、それは改善できたらよいと思う。障がいのある人も認知症になる人もいる。それを当たり前を受け止める土壌を整えることも、学校や地域の役割ではないだろうか。

◆「ヤングケアラーは悪いこと」なのか

様々な場所でヤングケアラーの話をする中で、忘れられない一言がある。「ヤングケアラーって虐待だよ」というものだ。確かに、子どもらしい生活をする権利を奪ってしまうという意味では虐待なのかもしれない。だが、家族のケアをして家族を支えることは、マイナスの側面だけでは捉えられないと思う。忍耐力や思いやり、障がいや病気の人への共感など、ケアを通じて身につくものがあつたという当事者の声もある。何より、「ヤングケアラーはかわいそう」「子どもをヤングケアラーにさせているのは家族が悪い」という見方が広まると、当事者や家族側が敏感になり支援につながりにくくなる恐れがあると思う。

日本に根付いたばかりのヤングケアラーという概念が、偏見なく広まり、当事者一人一人が自分に合った支援に出会えるよう願っている。



元ヤングケアラーの声

まだヤングケアラーという言葉が知られていなかった頃から、家族のケアを担うこともたちがありました。今回インタビューをさせていただいたお二人も、そんなヤングケアラーだった方々です。さまざまなケアがある中で、精神疾患や知的障害を抱えた家族やきょうだいのケアを幼いころから担っていたお二人から、それぞれ当時の思いや今改めて感じることなどを伺いました。（聞き手：I&Y）

.....

▽Mさんプロフィール（30歳代）

父（がん治療、7年前に他界）、母（発達障がい、若年性アルツハイマー型認知症）、弟（重度知的障がい）のケアを担う。現在、障がい者施設の職員

■これまで、どんなケアをされてきたのですか？

父・母・弟のケアを担っていました。7年前に他界した父が大腸がんを患っていて、医療ケアや通院の付き添い、亡くなった際は葬儀の執り行いもしました。母と父が不仲だったので私が全てやるしかありませんでした。父が亡くなった数年後に、母が発達障がいと若年性アルツハイマー型認知症だと診断されました。日を追うごとに悪化し、最近グループホームに入居しましたが、入居までの5～6年くらいは食事の準備や洗濯・掃除、通院の付き添い、デイサービスやヘルパーさんとの連絡調整やお金の管理をやりました。

これまで母が見ていた重度知的障がいの弟のケアも一緒に始まりました。弟も施設入所を希望しているのですが狭き門で入れず、今もショートステイ制度を利用しています。弟は体が弱くて入退院がかなり多く、母がずっと付き添っていました。だから家のことは6歳くらいからやっていた気がします。今思えば、そこからケアラーだったんだと思いますが、当時はそれが普通だと思っていました。今こうやってヤングケアラーの話を外でできるようになってはじめて「ウチ普通じゃなかったんだ」と気づきました。

友人には言えなかったんです。当時音楽をやっていたんですが、父の介護が始まりやめました。通院の送り迎えもあるからお酒もやめて。ある時「お父さん病気になっちゃって…」とポロっといったら、それから一切、飲み会に誘われなくなったんですよ。友だち付き合いもほぼなくなってしまいました。みんな気を使ってくれていたと思うんですが、普通に接してほしかったなと思います。ヤングケアラーがもう少し社会に認知されれば、そういう思いをする人たちがいなくなるかなと思います。が難しいですね。

■いまの職業を選ばれたのは？

芸術の裏方の仕事に興味があり、学生時代にインターンシップに行きました。この仕事は土日休みではないし時間も不規則というのもあり、ちょうど大学卒業前くらいに弟が大きな手術が決まった時に「あ、仕事始めたら家に誰もいなくなっちゃうな」「私、この仕事できないな。夢を追いかけない方がいいんだろうな」と思いました。色々と考えて障がい福祉の道を進むことに決めました。働きながら勉強して資格も取りました。

■ヤングケアラーヘルプネットには、どういう経緯でつながったんですか？

母の認知症が悪化し、弟のケアも入ってきた時は本当に辛かったですね。職場には状況を伝えていて理解していただいて。でも仕事と介護の両立がしんどくなっちゃって、たまたま「きょうだい児、大人」って検索し

インタビュー

たんです。そうしたら「ヤングケアラー」って出て。そこからヤングケアラーヘルプネットにつながりました。「二人の介護をされていて、しんどくて…」と思いをぶちまけてしまったんですが受け止めてくれました。参加者には同じような経験をしている人や私より大変な経験をしている人もいて、使える制度や声掛けの仕方を教えてもらう中で少しずつ自分の中で整理ができるようになってきて、こうして話せるようになったというところです。

全く話をしたくない時も、誰の話も聞きたくない時もあるんですよ。だけど、ふらっと参加してみんなの話を聞いていると「私、まだまだ頑張れるかもしれない」「みんな頑張っているから私ももう少し頑張ってみるか」と思えたり。つながりってすごく大事だなって思います。

■参加してみて、どうでしたか？

話すことでこんなに楽になるかと思いました。あと“自分はひとりじゃないんだな”とも。ケアラーには色々な人がいて、私の中ではどうしようもなかったことも、話しを聞いてもらったら解決の糸口が見つかり「あ、それほどでもなかったかも」とか。話を聞いてもらうことで母にも弟にも優しくなれた気がします。母はこんなことで悩んでいたからああいう態度だったのかなとか、話しているうちに整理できてきて。おそらく母と弟だけ見ていたら「なんでそういう態度をとるのか」とイライラしてしまっていたと思います。

■さいごに、ヤングケアラーを支える上で、必要なことはどんなことだと思いますか？

母と弟の介護で一番大変だったのは、障がいと高齢の両方のサービスの調整をしなくちゃいけなかったことです。役所の窓口も違い、仕方ないことですが役所内での繋がりも薄いんですよ。これは福祉の課題だなと思います。「他の分野のことはできないので、娘さんのほうで調べてみてくださいね」で終わらせず、“家族を

支える”サービスが必要だと思います。

ネットでヤングケアラーの記事が掲載され、コメント欄に同情があふれているのを見ると認知が深まる反面、現状は変わらない苦しさで複雑な気持ちになってしまいます。やっぱり制度や仕組みづくりなんだよな、と。私の介護は現在進行形ですが、母と弟が施設に入って少し落ち着いたから、自分の経験を話せるようになったということはあると思います。現状を伝えていくことで制度や仕組みが整っていくのであれば、話せる人が訴えていかなきゃいけないんだろうなと思っています。

.....

▽Hさんプロフィール (50代)

7歳頃から高校3年生まで、母(強迫性障がい)のケアを担う。進学、一般企業での勤務を経て、現在はケアマネジャーとして居宅介護支援事業所に勤務。

■これまで、どんなケアをされてきたのですか？

母親のケアを担っていました。のちに強迫性障がいと診断されましたが、当初はうつ病のような状態で起き上がれず寝てばかりで、ちょっと異常というか恥ずかしいというか、普通のお母さんと違うなと思っていました。

母はパート勤めをしていた時期もあったのですが、朝なかなか出かけられず、走ってなんとか電車に乗っていました。帰りは駅まで迎えに行くのが私の日課でした。何か忘れたんじゃないかと何度も振り返り、時には来た道を戻ったりしながら徒歩10分ぐらいのところを1時間ぐらいかけて帰りました。自宅でトイレから出られないときも「大丈夫だよ」ってそばですずっと言い続けていましたし、夜中も呼ばれることがあって時間を割かれたし、結構疲れましたね。

父親が頼りではありましたが、誰にもヘルプを求めることなく家事も奮闘していて、できたりできなかったりっていうところを私と分担していました。ただ、父もどうし

ていいか分からずイライラして、母に手をあげたり喧嘩することもあり、それを止めに入るのは辛かったです。

4つ年下の弟もいましたが、保育園のお迎えや小学校で必要なものの準備なども「お姉ちゃんだから」と言っ
て母がいつも私を頼りにしていたので、子どもなりに「私
がいなくちゃ」という気持ちでやっていたのかなと思います。

■ いつまでケアをされていたのですか？

高校3年生のときに、伯母（母の姉）が母の異変に
気づいて病院に連れていき、初めて診断名がつきました。
伯母は父や私を責め、母は伯母の家に住むことにな
りケアをバトンタッチしました。そのことで私は言い
表せないような憤りや脱力感を感じてしまいました。母
との日常でやることから逃れたいとか、母と暮らしたく
ないと思ったわけではないし、今日からやらなくていい
よってという話ではないんですよね。母は母で大事な人
だったわけで…

母は「何か変」だけれど、しっかりする時もあつたの
で、子どもの頃の私は「普通のお母さん」を求めてい
たような気がします。母が診断を受けてからは、「病人
の母」という見方しかできなくなってしまった。「本来
の母親像」を求めていた時期が長すぎたので、もっと
早いうちに「病気を持っていて母なんだ」という概念
を持てていれば、今こんなに向き合えない状況になら
なかったのかもしれないなと思ったりします。

■ どんな学生時代を送っていたのですか？

学校生活は普通に送れていました。夜中に母に呼ば
れて起きてしまった翌日は眠かったりするんですが、ケ
アをするのが当たり前環境だったので、「なんで私ばっ
かり」とか「まあ仕方ない」と思ったことはありません
でした。

小学生の頃、友達から「家に遊び行っても良い？」っ

て言われたこともありましたが、「ちょっと散らかって
るし…」とか言ってごまかしてなかなか本当のことを話せ
ませんでした。学校の先生にも家のことは話せなかつ
たのですが、先生と交換日記をするのがとても楽しくて、
他愛もないことや架空の物語を書いて先生に読んで
もらったりすることが心の拠り所でした。

ただ病気の特性なのか、人前だと母がお母さんらし
くするときもあって、授業参観や運動会に頑張ってきて
くれたときはすごく嬉しかった覚えがあります。

■ 当時、支えになったことはありますか？

夏休みや冬休みに田舎の祖父母の家に行くのが楽
しみて、今思うと実生活から離れられる日々でした。小
学校6年生のときに一度、父方の祖母に「ちょっとお
母さんが変なんだ」と漏らしたことがあったのですが、
祖母は何も言わずにそうだったのかと話を聞いて泣い
てくれました。何か助けて欲しいとかではなくて、打ち
明けたい時は、私にはおばあちゃんがいるなあっていう
気持ちはありましたね。

■ 身近にヤングケアラーだと思われる子どもがいたら、 どのように声を掛けたらよいでしょうか？

「あなた、ヤングケアラーでしょ？」って探しあてられ
てしまうと、居心地が悪くなったり、言わなきゃよかつ
たなと思ってしまうですね。

例えば今、私がヤングケアラーだったと思わせてく
れたように、世の中にそういう子がいるんだということ
を知っていれば、隠さずに「先生、うちのお母さんも
…」って言えたかもしれない。「今日学校でこんなこと
があつてさ」とか、「お母さんが授業参観に来てくれた
よ」ということを少しでも話せて、良かったねって聞い
てもらえたりするだけで嬉しかったのではないかと想像
します。「いつでも、話したいときに、話したいことを話
していいんだよ」というような関わりが大切だと思います。

神戸市における

こども・若者ケアラー交流と情報交換の場「ふうのひろば」について

特定非営利活動法人こうべユースネット

理事長 辻 幸志

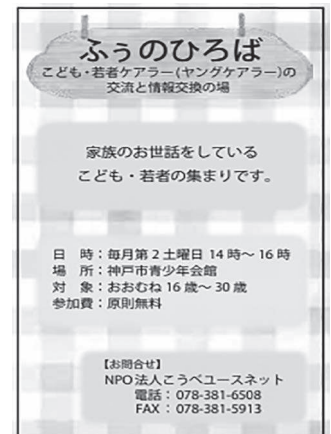
■「ふうのひろば」設置の経緯

神戸市では、2021年6月に全国に先駆けて「こども・若者ケアラー相談・支援窓口（以下、窓口）」を開設し、その支援活動をスタートしました。活動のきっかけは、2019年10月に市内で起きました「20代の若者ケアラーが介護に追い込まれ、同居していた認知症の祖母を殺害してしまう」という大変不幸な事件でした。久元喜造神戸市長から特命が降り市役所内にプロジェクトチームが発足し、こども・若者ケアラー（以下、ケアラー）支援について検討することからはじまりました。

その後、2021年10月にケアラーの交流と情報交換の場「ふうのひろば」＝「居場所づくり」を神戸市から受託し、こうべユースネットが企画・運営に取り組み、1年以上が過ぎようとしています。

■実施目的やねらい

「ふうのひろば」は、当事者同士、支援者等とも出会い、互いを理解し認め合い、心落ち着き心豊かに生活できる日々を送ることにつながる交流・情報交換の場「心の居場所づくり」に取り組むこと、そして一時的な保護や避難・休息ができるレスパイトケアとしての場づくりにも取り組み、複雑な家族関係や多様な思い悩みに寄り添い、伴走することに力を注ぎその支援に取り組むことを目的としています。その上で、コンセプトとして、「出会い つながり ひびきあい」～孤独・孤立を防ぐ～を掲げ、「当事者のためではなく、当事者ととともに」を大切なねらいとしてケアラーと支援者との垣根をつくらないことをスタッフで共有し取り組んでいます。加えて、「ユースワーク」の視点を生かした専門性のあるコミュニケーション活動に力点を置き、取り組んでいます。



■プログラム（ブレないズレないプログラムを継続実践）

開設以来、毎月第2土曜日・14時に開催することを変えることなく実施しています。毎月決まった日程で開催することにより、ケアラーが自身のために使うことのできる大切な時間を都合してもらいやすいようにしたいことがその思いです。

プログラムのながれは…

①はじめのつどい

グランドルール「この場のお約束」の説明

②自己紹介 雑談たいむ

ケアラー個人をみる・確認する

③レクリエーションたいむ

行動・言動の確認

④ふうたいむ

カフェたいむ＝リラックスの中にも誰かが居られることの共有

⑤はなしましょう・ききましょうたいむ

分かってもらえてよかった・話してよかった

⑥ふりかえりたいむ おわりのつどい

自身をふりかえる

中心となる時間は、「レクリエーションたいむ」と「はなしまししょう・ききましようたいむ」となり、この2つのプログラムの融合がそこにいるケアラー・スタッフ、ともに気づく大切な時間になりますし「レクリエーションたいむ」があるから、自身のケアラー体験を話すことができるようになるのかもしれない。

上記のプログラムを実践するために、事前準備・確認共有のために窓口関係者とコーディネーターとの定例の連絡会議と開催直前のサポーター会議※を開催し詳細の調整を行い「ふうのひろば」に取り組んでいます。

■ みえてきたこと（大切にしている思い…）

開設当初は、窓口から紹介を受けたケアラーが「ふうのひろば」に参加されることを想定していました。現在は、交流・情報交換の場に集い、顔の見える関係を築き、支援が必要になれば、窓口につながることが無理のない包括的な支援であると捉えて、まずは「ふうのひろば」に参加していただければと考えます。その流れを天気予報に例えて、「居場所のち相談、時々連携、ところにより宅配」を合言葉に、ケアラーの居場所づくりに取り組んでいます。最近では、毎回2～4名程度の参加があり、定着してきたケアラーも数名います。初回参加のケアラーは、今まで友人に話しても解決することにはつながらなかったため（話をしても暗くなるだけだしなど）、他者にケアラー経験を話すのはこの場がはじめてという方も多いです。思いがつのり言葉につまる方もいますが、「お話しできて（聴いていただいて）すっきりしました！良かったです」の声もあります。

そのような場面を受けて、運営スタッフ全員が大切にしている時間が、会の終了後の「じかん」になります。次につながるよい時間にしたいと思い「話しただけ」にならないようにしたいと考え、終わった後で「なんであそこまで私は開示してしまったんだろう…」と感じてしまうと、人と話すことが辛くなることも避けたいとの思いです。

誰かが話したことを話題に他の人の意見があつたりします。そして他の人の意見が聴けることで、共感できる言葉があり

「分かってもらえてよかった」「話してよかった」につながることの積み重ねが「居場所」を主体的につくるパーツになると考えます。



■ まとめ（今後に向けて）

「ふうのひろば」の運営に関わり感じることは、ケアラー自身がケアラーであると理解できていない状況が多いのではと感じます。加えて、何かと気にし過ぎてケアラーが声を上げにくい状況もあるのではと感じます。

だからこそ、集う居場所の必要性は大きく、情報を広く発信すること、そして「あなたは、もしかしたらケアラーかもしれない」をしっかりと届けることのできる大人の存在と育成がますます大切であり、その場にも関わり地域の担い手づくりにも取り組みたいと強く考えます。



※ サポーター会議

ふうのひろばの運営には、社会福祉士や精神保健福祉士などの専門職の資格を有する方々に参画いただき、コーディネーターとともにその支援に取り組んでいます。

特集のテーマについて

よこはまユースでは、事業を通じて様々な場所で子ども・若者と出会います。その中には、友達と一緒に遊んだり好きなことをして過ごしたりする時間がもてない。悩み事があっても周りに相談できる相手がいない。また、そのような環境に自分がおかれていることにすら気づいていない子ども・若者もいます。

子ども・若者から、繋がりや成長機会を奪ってしまう要因と、それにより顕在化する課題は多様です。

その一例として今回は、「ヤングケアラー」を特集のテーマとして取り上げました。ヤングケアラーを特集するにあたっては、その背景にあるものを探るため、研究者・支援者・当事者の皆様にそれぞれの立場からお話を伺いました。

家族のケアを担っていることを周囲の人に知られたとたん、今までと違った対応をされるようになったり、いきなり過剰な介入をされて家族の在り方が変わってしまったりと、相談したことに対して後悔や悲しみを招いてしまうこともあるということも伺いました。このお話から、日頃私たちが子ども・若者に接するとき、自分の尺度だけで判断せず、まずは当事者の話を聞き、気持ちに寄り添うことがいかに大切かということを確認させてもらえました。

今回特集したヤングケアラーに限らず、よこはまユースではすべての子ども・若者が自分らしい時間を過ごせるように、そして安心して自分の人生を選べるように、皆さまとともに、青少年育成・支援の機会を拡充・継続していきたいと考えています。

これからもご支援・ご参画いただけますよう、お願い申し上げます。

<参考:ヤングケアラーをテーマとした、よこはまユースの事業>

■ 横浜市青少年育成センター 青少年の理解講座

2021年度 『ヤングケアラー支援の実際』

講師 / 木下 こゆる氏ほか (横浜ヤングケアラーヘルプネット)

2022年度 『ヤングケアラーの支援』

講師 / 勝呂 ちひろ氏・青木 大三氏 (一般社団法人 Omoshiro)

■ 子ども・若者エンパワメントセミナー

2022年度 『ヤングケアラー ～気づき、つなげる～』

講師 / 濱島 淑恵氏 (大阪歯科大学医療保健学部教授)

■ 知っておきたい!子ども・若者どこでも講座

2022年度 ヤングケアラーのテーマを新設。横浜市内5つの団体にて開催。

講師 / 横浜ヤングケアラーヘルプネット、一般社団法人 Omoshiro

■ よこはまユース職員を対象とした人権研修

2021年度 『こどもの人権としてのヤングケアラー』

青少年の「成人」意識と成年年齢引き下げに関する調査報告

■ 調査の目的

成年年齢が20歳から18歳に引き下げられる「民法の一部を改正する法律」が2022年4月1日より施行されました。これに先立ち、よこはまユースでは2020年度に「青少年の『成人』意識に関するヒアリング調査」を実施しました。その結果をふまえ、青少年の「成人」に関する意識と成年年齢引き下げに関する認知・課題・ニーズを把握するため、追加のアンケート調査を実施しました。

■ 調査の概要

対象者： 横浜市内在住・在学・在勤の17歳～25歳の男女計900人

調査期間： 2022年3月

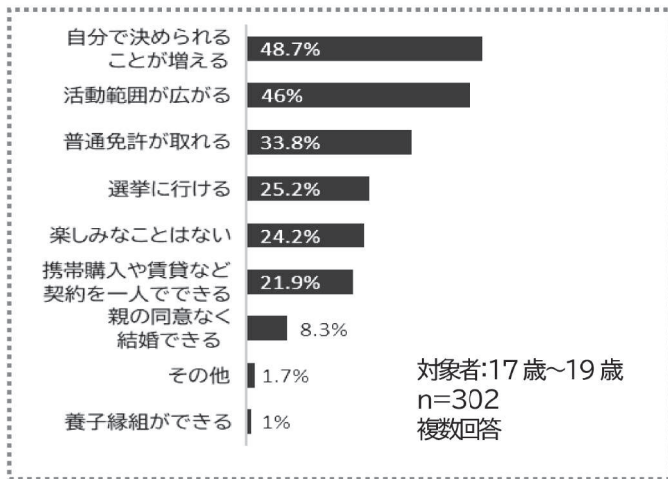
調査方法： LINEリサーチを使用したwebによるアンケート調査

調査監修： 土屋 隆裕（横浜国立大学）

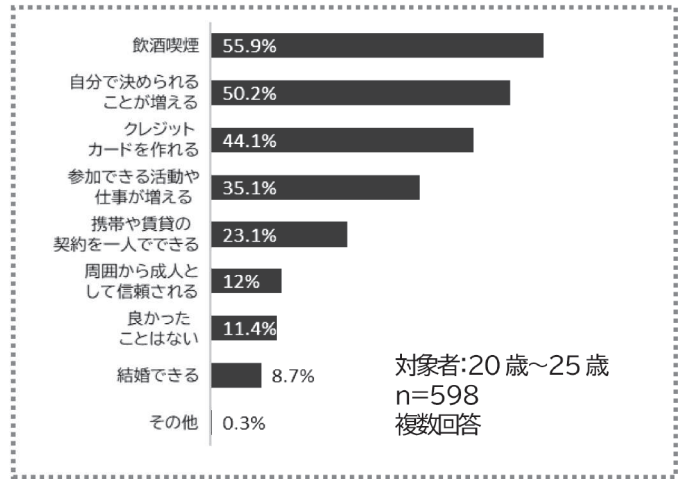
※本調査は2022年3月に実施したため、この調査報告書では17歳～19歳を未成年、20歳～25歳を成年としています。

■ 調査結果 (抜粋)

Q. あなたが成年(成人)になることで、楽しみなことを教えてください。

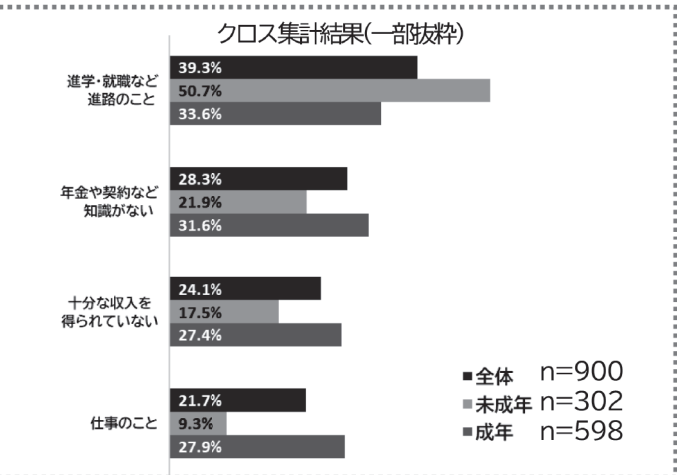
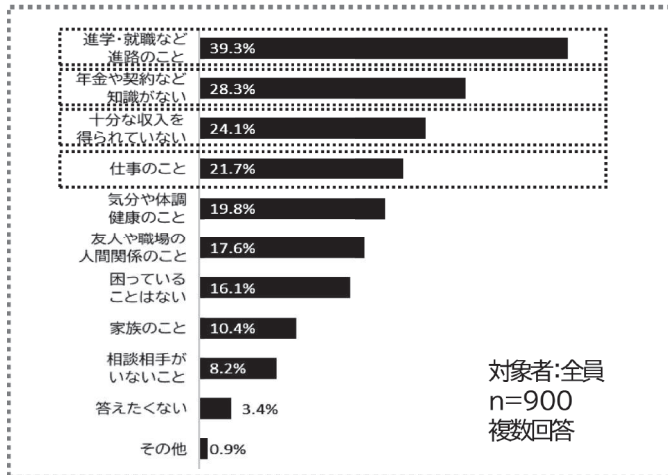


Q. あなたが成年(成人)して良かったことを教えてください。



未成年者は成年になったら自分で決められることが増え、活動の範囲が広がることを楽しみにしています。自由回答では飲酒や喫煙ができることや、クレジットカードを作れることを挙げる人がいました。成年者では飲酒喫煙ができることや、自分で決められることが増えて良かったと回答した人が半数を超えました。一方で未成年者の約4人に1人(24.2%)は成年になることで楽しみなことはない、成人の11.4%は成人して良かったことはないと回答しました。

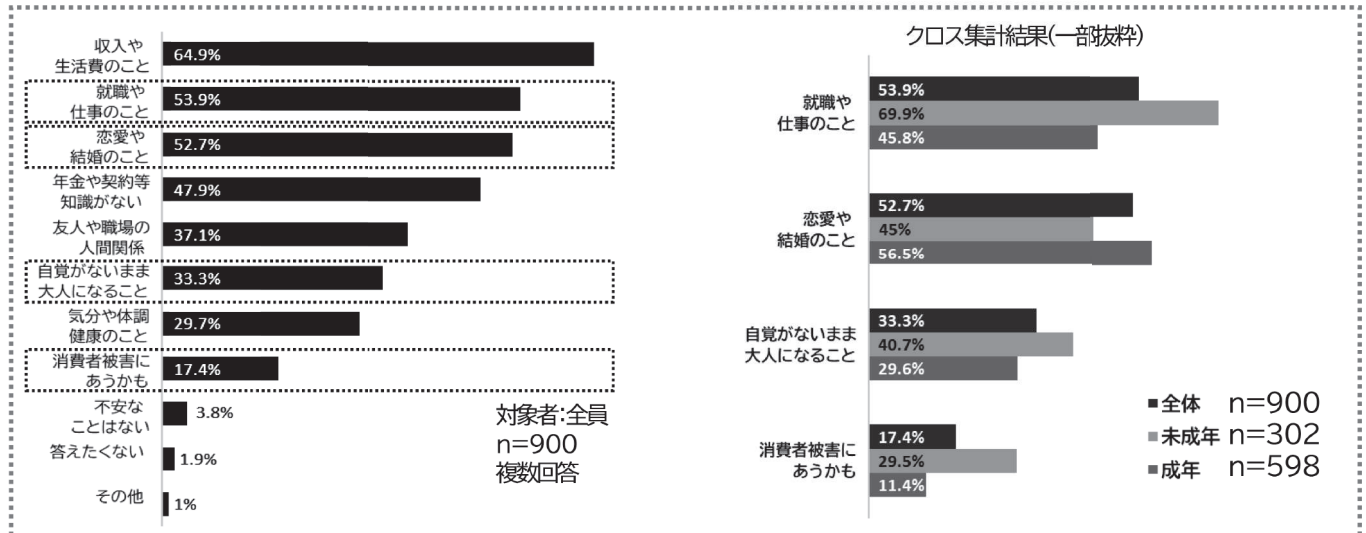
Q. あなたが今困っていることを教えてください。



最も回答が多かったのは進学・就職など進路のことで、特に未成年者では約半数が挙げています。一方成年者は年金や契約などの知識がないことや仕事のこと、十分な収入が得られていないことを挙げた人が多くなっています。

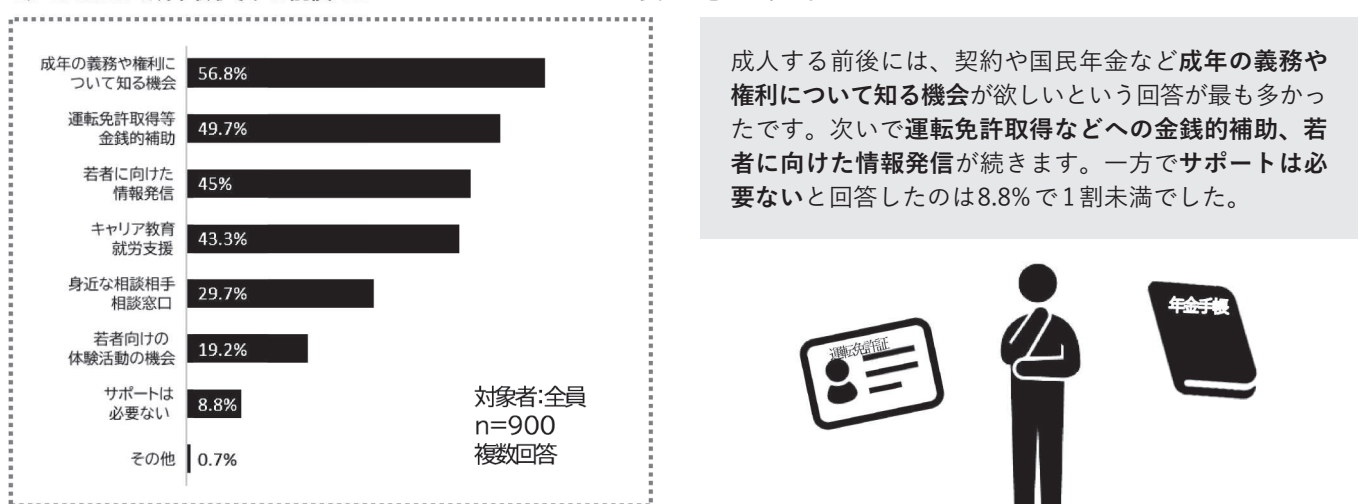
データで見る青少年

Q. あなたが、今からこの先5年~10年くらいの間で不安なことを教えてください。

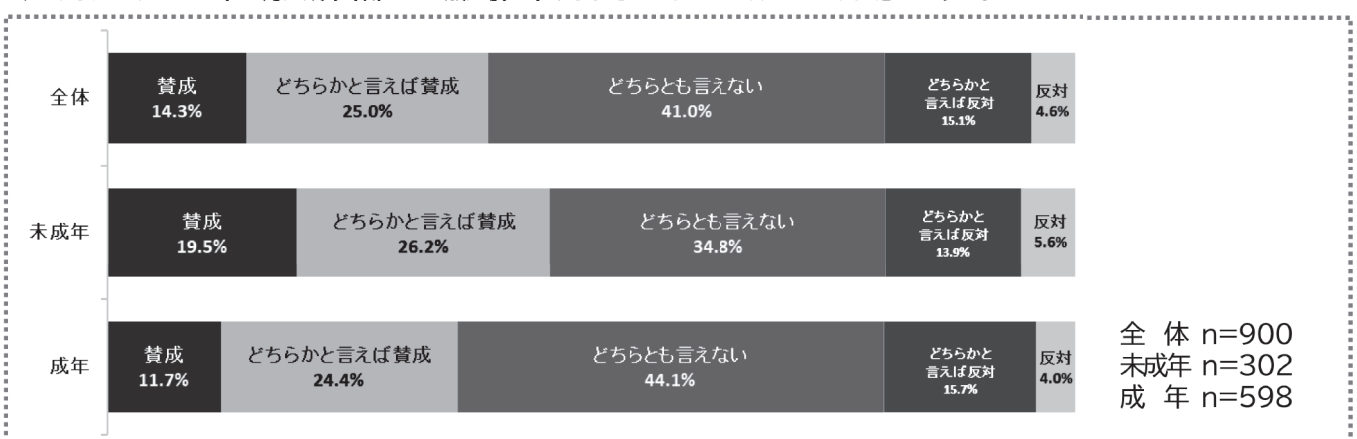


近い将来の不安で多かった回答は上から順に、収入や生活費のこと、就職や仕事のこと、恋愛や結婚のことでした。年齢別の比較では、未成年者は成年者より就職や仕事のこと、自覚がないまま大人になることや、消費者被害にあうかもしれないことと回答した人が多く、成年者は未成年者より恋愛や結婚のことを挙げる人が多くいました。

Q. あなたは、成年(成人)する前後にどのようなサポートがあったら良いと思いますか。



Q. あなたは、2022年4月に成年年齢が18歳に引き下げられることについて、どのように思いますか。



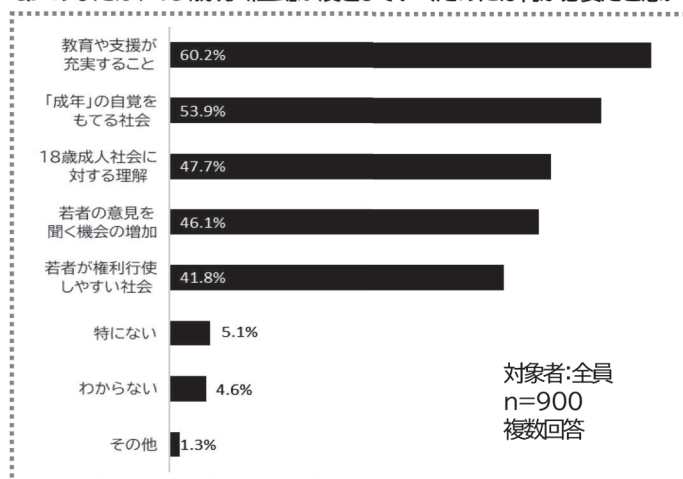
成年年齢が18歳に引き下げられることについて、全体では「賛成」「どちらかといえば賛成」の合計は39.3%でしたが、年齢別に見ると未成年者は「賛成」「どちらかといえば賛成」の合計が約45.7%、成年者は約36.1%で、成人したの方が賛成と回答した人の割合が低くなりました。

Q. あなたは、成年年齢引き下げに関する以下の意見に同意しますか。

質問	若者の実態に あっているから良い	若者の意見を 聞く機会が増えるから 良い	若者の自己 決定の機会が増えるから 良い	選挙権がある 年齢なので良い	大人の自覚を 持てない人が多そうで不安	無責任な大人が増えそ うで不安	十分な判断力 がある人は少なそうと感 じるので不安	成年に関する知識や社 会経験が少ないので 不安	教育や相談窓口など支 援の仕組みが整って いないので不安
同意する/ どちらかと言えば同意する (合計)	35.1%	62.4%	54.4%	60.4%	69.8%	60.9%	60.3%	72.2%	60.5%
どちらとも言えない	33.8%	24.0%	29.6%	26.2%	20.3%	22.9%	25.2%	19.8%	30.8%
同意しない/ どちらかといえば同意しない (合計)	31.1%	13.6%	16.0%	13.4%	9.9%	16.2%	14.5%	8.0%	8.7%

成年年齢引き下げを“良いこと”と前向きに捉える意見よりも、“不安なこと”と捉える意見に「同意する」「どちらかと言えば同意する」と回答した人の割合の方が高い傾向が見られました。一連の質問の中では「成年に関する知識や社会経験が少ないので不安」という意見に「同意する」「どちらかと言えば同意する」と回答した人の割合が最も多く7割を超えた一方、「若者の実態にあっているから良い」という意見に「同意する」「どちらかと言えば同意する」と回答した人は35.1%で、最も低くなりました。

Q. あなたは、「18歳成人社会」が浸透していくためには何が必要だと思いますか。



最も多かった回答は教育や支援が充実することでした。次いで「成年」の自覚を持てる社会になること、18歳成人社会に対する理解が続きます。一方で特になしと回答したのは5.1%でした。その他に自由回答では以下のようなさまざまな意見が挙がりました。



- ・ 聞く機会を増やすだけでなく、それを反映していく社会になること。
- ・ 今の段階での大人がその手本となること。
- ・ 騙される若者も多そうなので、金と性と権利について教育すべき。
- ・ 「20歳にならないとできないこと」があるということをも多くの18歳成人が理解すること。
- ・ 18歳から成人だとしても飲酒喫煙と同様に、アダルトビデオへの出演も20歳からにするという18歳への保護が必要。

- ・ 18歳という年齢にこだわりすぎないこと。
- ・ 責任を求めること。
- ・ 20歳になったらできる事を18歳から全てできるようにする。
- ・ 子育て支援が充実していれば、予備校などにかけられるお金の格差から生まれる学歴の差が縮まり、成人が18歳に引き下げられても社会に出る年齢が平均して上がるのである程度の常識が備わった状態で社会に出ることができると思う。

まとめ

- ▶ 「2022年4月から成年年齢が18歳に引き下げられる」ことは95%が知っていると回答しました。一方で「飲酒喫煙ができるのは20歳以上のまま」(89.8%)、「契約行為が一人のできるようになる」(57.7%)、「養子縁組ができるようになる」(8.3%)など、具体的に知っている内容は選択肢によって大きな差が出ました。
- ▶ 青少年は成人すると活動の幅が広がることをメリットとして捉えながらも、年金や契約などに関する知識がないことや経済面などで不安を抱えています。権利の拡大を前向きにとらえることができるように教育の機会を提供し、必要な情報を若者に届けるための取り組みが必要です。また、経済的な基盤が未熟な青少年にとっては運転免許取得などの際の金銭的補助も有効な支援になるかもしれません。
- ▶ 18歳成人社会が浸透するためには社会の理解が進むことも必要です。青少年が成年の自覚を持てるよう、成年への移行期に周囲の大人が必要なサポートをすることや、若者の意見を聞き反映させる社会の仕組み作りが求められています。

ヨコハマの子ども・若者の成長を応援する人たちのための情報誌

YOKOHAMA EYE'S 2022

2023年3月 発行

■ 編集・発行

公益財団法人よこはまユース

〒231-0011 横浜市中区太田町2-23 横浜メディア・ビジネスセンター5階

TEL: 045-662-4170 FAX: 045-662-7645

Mail: kikaku@yokohama-youth.jp

URL: <https://www.yokohama-youth.jp/>
